

カタブツ検事の  
セフレになったと思ったら、  
溺愛されておりました

---

にしのムラサキ

*Muraaki Niobino*



Eternity  
BUNKO

## 目次

カタブツ検事のセフレになったと思ったら、  
溺愛されております

5

書き下ろし番外編

可愛い妻が

俺の記憶にないなんらかの記念日を  
祝おうとしている件について

329

カタブツ検事のセフレになったと思ったら、  
溺愛されております

## 一章 (side) 莉子)

サプライズはいけない。

特に、遠距離恋愛におけるサプライズは最悪だ。

「蓮、何してるかなあ」

私はお土産の八つ橋を片手に、エレベーターの壁に背を預け、一か月前まで恋人と同棲していた東京二十三区の隅っこにあるマンションの鍵を取り出す。八つ橋は季節限定のいちご味だ。

チャリとスマホを見てみれば、時刻はちょうど十六時。

遠距離中の彼氏のところには、「やつほーサプライズで帰ってきたよ！」をして喜んでもらおうと、現在の住居たる京都からるん気分で作ってきたところだった。

「会うの久しぶりだなー」

寂しいけれど、毎日電話もしているし、連絡は欠かさない。付き合ってから四年目にして

は、まあまあラブラブなほうだと思っ。

五階に着いて、懐かしい廊下を歩き出す。手の中で蓮と色違いのキーケースがちやりつと音を立てた。ドアの前に立ち、軽く深呼吸してから鍵を開ける。勢いよくドアを開けて一歩踏み込み、「ただいまー」と言う私の浮かれた声に返ってきたのは、人口甘味料みたいに甘ったるく上ずった喘ぎ声だった。

「あつ、蓮くん、蓮、イク……っ」

頭の中が真っ白になる。何これ、何が起きてるの？

思わず靴箱に寄り掛かった。置いてあったはずの、ふたりでグアム旅行に行ったときに買ったガラス細工の写真立てが見当たらない。そんな小さなことに、私は聞こえ続いている喘ぎ声よりショックを受けていた。

「なんで」

零した声が嬌声にかき消される。手から力が抜けて取り落とした鞆の音に、嬌声が止む。

足が震えていた。だって……だって、私、知っている。さっきまで聞こえていた喘ぎ声の主を、知っている。

慌てたような足音とともに、「莉子！」とさっきまで大好きだった人の声があった。

「蓮……」

「あのおつ、莉子、違う。違うんだ」

現れた蓮が着ていたのは、慌てて羽織ったと思われるシャツ一枚。せめて下も穿いてほしい。それだけ慌てていたってことなのかもしれないけれど。

狼狽した様子で説明する恋人の背後から、「誰？」というのんびりとした声がある。蓮のTシャツだけというしどけない格好で現れたのは、同僚で入社以来の親友だった。

転勤が決まり『遠距離になるの心配なんだ』と相談した私に、ニコニコと『莉子と行く橋くんなら大丈夫だよ』って言って、私の転勤を榮転だと喜んでくれていた友達。

今日私が、サブライズでここに来ることを知っていた……親友。

「香奈穂……どうして」

「あ、莉子。久しぶり〜。一か月ぶり？」

勝ち誇った顔だった。それを見ても、わななく唇は何も言葉を発してくれない。

「莉子」

蓮の声に弾かれるように玄関のドアをばたんと力いっぱい閉めて、来た道を……来たばかりの道を通って駅まで戻って、さっき乗ったばかりの電車と新幹線を乗り継いで、京都まで戻った。

「戻った」と認識したのは改札を出てからのこと。夜空に浮かび上がる京都タワーが視界に入ってからだった。スマホには蓮からの着信がずらりと並んでいる。私は震える手で着信拒否した。香奈穂のもの。

「……最悪だよ」

ぼつり、と咬いた声くはやが、春の京都駅の雑踏に消えた。

「……最悪だよ」

ぼつり、と咬いた声くはやが、春の京都駅の雑踏に消えた。

胸が苦しくて涙が出そうになったけど、泣いたら負けだなと思っちゃって……よし飲もう、と京都で一番繁華な飲み屋さん街まで行った、ところまでは覚えている。

「あれ？」

頭がくらくらして、痛い。

「何これ？」

視界の隅に、飲み屋さん街の灯りを反射してぼんやり光る満開の桜と、穏やかに流れる浅い川が見えた。

さっきと同じ飲み屋さん街にいることは間違いない。

ただ、知らない男の人に、半ば抱えられるように歩いていた。揺れていると感じたのは、そのせいだったらしい。

「……あれ、え？」

「あ、起きちゃった〜」  
見上げると、茶髪の「明らかにチャライです」って感じの男の人が私を覗き込んでニタニタと笑っていた。同い年くらいだから二十代半ばとか、それくらいだと思う。

「今ねえ、莉子ちゃんさ、オレと飲みなおそうって言ってたとこだよ」

やけに猫なで声で彼はそう言う。

「は、え、そう……なんですか？」

酔いすぎて、まったく記憶がない。どうしよう、こんな展開、生まれて初めてだ。

「あのう、誰ですか？」

「えーっ、忘れちゃったの？」

その人はぎらぎらした瞳で私を見ながら言う。背中に怖気が走って、ようやく危機感が湧いてきた。かなりまずい気がする、この状況！

「オレの家で飲みなおそう、って言ってたのに」

「え……！」

私のバカ！

慌ててその人から距離を取ろうとする。……けど、脚がもつれていうことを聞かない。ひゅ、と喉から声が出た。本当に何してるの、私！

けれど、この時点で意識が戻ったのは不幸中の幸いだ。……なんとか逃げなきゃ！

「あの、すみません私、帰らないと」

その人の手を振り払おうとするけれど、まだ身体がうまく動かない。

「あー、やばそだね？ 大丈夫、オレんち近いから」

「……や……っ」

大声を出したのに、喉に、お腹に、うまく力が入らない。

涙が浮かんできて、どうしたらいいか分からなくて、迂闊な自分を責めても今更どうしようもなくて――

「莉子」

ふと、低い声が出た。

誰かの腕の中に、奪われるように抱き留められて目を睜る。えっど？

「ここにいたのか。捜した」

頭に「？」マークをつけながら、今私を抱き留めている人を見上げた。飲み屋さん街だというのに、仕立てのよさそうなスリーピーススーツをきつちりと着込んだ、背の高い男性だ。硬い胸板が背中当たる割に細身で、整った顔立ちをしている。もちろん彼に見覚えはない。

混乱して動けなくなっている私に、茶髪さんは「なんだ、連れいたんだ」と舌打ちをひとつ。

「期待させんなよ、クソビッチ」

「何がクソビッチだ、貴様」

「道で座り込んだ彼女を抱きかかえて歩き出すから、知人かと思つて様子を見ていれ

ば……彼女に何をするつもりだった！」

「しらねーよ、つうか酔っ払い放置するほうが悪いだろ！」

捨て台詞のよう<sup>ぜりふ</sup>に茶髪さんは言つて、さつさと人混みに消えていく。

「……あの」

そつと助けてくれた男性を見上げる。

私が言葉を続ける前に、彼は怒りに満ちた目の色をさつと心配一色に変えた。そうしてじつと見つめられると、なぜか何も言えなくなる。

「何もされていないな？」

「……は、はい。ありがとうございます」

お礼を言つた私を見て、彼はその端正なかんばせに不思議そうな色を浮かべる。

「久しぶりだからつて他人行儀すぎないか？ 莉子」

「いや、その、ええつと」

私の記憶リストに、彼みたいな眉目秀麗<sup>びびりしづれ</sup>な男性はいない。そもそも、なんで名前を知つ

ているんだろう。

「しかしビックリした。莉子に似た人がいると思つたら本当に莉子で、得体の知れない輩<sup>やから</sup>に連れていかれそうになつていて……何があつた？」

彼は整つた眉根を寄せ、私を見下ろす。ざあつと春風が吹いて、桜の花びらが目の前を掠<sup>かす</sup>めて飛んでいった。

頭の奥がちりつとする。

あ、またお説教モードだよつて、彼を知らないはずなのに——そう思つてしまった。

「……あのう」

私は違和感と既視感でいっぱいになりながら、おそるおそる口にする。

「どちらさまでしようか……」

その人は、たつぷり数秒は絶句した。それから苦笑いして、「分からないか」と肩をすくめる。

「十七年ぶりだからな。……久しぶり。菅原莉子さん」

私のフルネームを告げたあと、彼は軽く頬<sup>ほ</sup>を緩<sup>ゆる</sup>めた。

十七年前つて……？ 十歳のときに会つたということ？ 私は首を傾げる。

「小学校五年生で転校していった、宗像<sup>むなかた</sup>という少年については？」

「え？ あ、おぼえて、る……きょーすけくん、宗像恭介<sup>きょうすけ</sup>くん」

ぽかん、と彼を見上げながら言うと、アルコールでふわんふわんの頭が、じわじわと現実を理解していく。

「うっそ！ 恭介くん!? 久しぶり！」

思わずスーツのジャケットを掴みながら叫ぶ。恭介くんは穏やかに、ほんの少しだけ唇を緩めた。

十歳だった男の子と、今日の前にいる二十七歳の男の人が、うまくリンクしない。

しないけど、どうやら目の前にいるのは私の初恋の人、宗像恭介くんの間違いない——らしい。

「……という、わけでした。情けない限りでございます」

何があったんだ、と心配しきりの彼とやってきたのは、近くのバーの個室だ。窓からは京都の街並みが眺められる……といっても、この街は景観規制があるせいで、そう高層ではないのだけれど。

個室にしたのは、あまり人に聞かれない話ではないからだだった。

遅い時間だというのに、恭介くんは快く話を聞いてくれた。そして、話を聞き終わると、彼はものすごく怖い顔をして「そんな最低な男のことは忘れる」と低く言った。

「君にはもっと相応しい人が、……いるはずだ」

「なぜ言いよんだの、恭介くん」

さすがにノンアルのカクテルを注文したけれど、それでもまだ酔いが醒めてないこともあるって私は強気に突っ込む。

「いなそう? もう私に彼氏はできなそうってこと!？」

「ち、違、そうではなくってだな」

「いーんです、いーんですよ、もー」

私はふん、と鼻息荒くノンアルカクテルを喉に流し込む。

「もう当分恋愛とかはいいや! うん」

私はごくごくひとひり頷き続けた。

「こうなったらもう、遊んでやるんだから」

私は半ば八つ当たり気味に恭介くんに言い散らかす。恭介くんはその端整なかんばせに明らかに驚愕と狼狽を浮かべている。

「あ、遊ぶ?」

「そう。だってね、恭介くん。私、真面目だったんだよ。その彼氏と付き合うまでね……処女だったし」

ぶふう、と恭介くんはビールを噴き出す。幸いほとんど口内になかったのか、口の周りがビール塗れまみになっただけで済んだ。

「大丈夫？」

「わ、悪い。しかし、こんなことを急に言う君サイドにも問題がありはしないか」

「ん、ごめんね。でも、でもね」

じわ、と涙が浮かんでくる。

恭介くんはハンカチでも探しているのか、ワタワタとスーツのポケットに手を入れる。結局見つからず、スーツの袖でそっと、本当にそおっと私の目を拭<sup>ぬぐ</sup>ってくれた。

「ふふ」

つい目を緩めた私を、彼は不思議そうに見つめる。

「恭介くん、相変わらずだ」

私は「ありがと」と笑って言いながら思い出す。小学生だった恭介くんも、優しくてまつすぐで、でも少し融通<sup>ゆうつう</sup>が利かなくて、……そんなことも、好きで。

「変わらないなあって」

「……君もな」

「そうかな。変わっちゃった。……処女じゃなくなった」

「っ、そこは大した問題では、ないのでは」

慰<sup>なぐさ</sup>めようとしてくれた言葉だとは分かっているけれど、私は首を横に振る。

「ダメなの。だって、私……結婚する人としかないって、決めてたの」

堅すぎる考えだったのかもしれない。でも、私にとっては……

「……そうなの、か」

恭介くんは微<sup>かす</sup>かに声を落とす。

「だから、彼とは、その、つもりで、覚悟で」

そんなところが、もしかしたら運は重く感じていたのかも。だから浮気なんてされたのかも。

ううん、浮気なんかじゃなかったんだろう。そうじゃなきゃふたりの思い出の品を片付けたりなんかしない。折を見てそのうち別れを告げるつもりだったんじゃないかな。

泣き出した私を、おろおろと恭介くんは見つめる。

「ご、ごめん、すぐ泣き止むから……っ」

「莉子」

袖じゃ足りない判断したのか、恭介くんは私の横まで移動してきて、軽く、羽でも抱えるみたいに抱きしめてくれた。

広い肩幅と厚い胸板。目の前にはくつきりとした喉仏。

まだ頭のどこかに十歳の恭介くんがいるせいで、恭介くんがちゃんと男の人の身体をしていることに——むしろ割と筋肉質なことに少し驚く。

恭介くんの匂いは、なんだか落ち着いた。

「莉子、……ハンカチ代わりにしていいから」  
 「ごめんね、こんなお高そうなスーツに涙と鼻水つけちゃって……っ、クリーニング代出すからね」

そう言うと、恭介くんが少し笑う気配がした。

「気にしないでいい」

「ありがと……」

ゆるゆると私の後頭部を撫でる、あの頃とは全然違う、大きな手。

しばらくして泣き止んで、すうと離れる。恭介くんを見上げて笑ってみせると、彼は少したく読めない表情をして、それから向かいの席に戻った。

「ありがと、ね」

「いや」

ぶっきらぼうに恭介くんは答える。照れているのが分かって、ちよっぴり可愛いだなんて思ってしまう。私は小さく笑って、それから続けた。

「だからね、遊ぼうかなって思ってる。男の人と」

「……すまん、話が読めない」

「もう誰としても同じ。何人としても一緒」

私の言葉に、恭介くんが表情を凍らせる。まるで自分が傷つけられたかのような表情

だった。

「大丈夫……さっきみたいなのはもうないようにする」

安心させようと笑顔を見せる。私だって、無理やりされるのは嫌だ。

「でもね、それくらいはっちゃちゃったほうがスッキリするような気がするの」

恭介くんは相変わらず痛々しそうな表情を浮かべて、私を見つめ続ける。

「ごめんね。私さ、昔から思い切りが変な方向に行きがちだから……」

「知ってる。覚えてる。けど、それは」

そこまで言って頭を抱えた恭介くんは、何かを考えてるみたいに黙り込む。

「あは、困るよねえこんな話、急にされても」

気にしないで、と言う私の顔を、ぱっと顔を上げた恭介くんがじっと見つめる。

「莉子は……今は恋愛する気がなくて、でもセックスはしたい？」

「……まあ、端的に言うと、そう……なるのかな？」

どうなんだろう。知らない人とセックスって？

リアルに想像すると、正直したくないなあと思う。やっぱりそういうの、向いてないんだらうか。

「よく分かんない」

乾いた苦笑を漏らすと、恭介くんは私を見つめたまま淡々と言い放った。

「じゃあ俺としよう」

「ん？」

「性行為を含んだ遊び」

「……はい!？」

ぽかん、と恭介くんを見つめた。耳を疑う。今、彼、なんて言った？

「俺じゃ不足か？」

そう言っただけは私の手を握った。大きな手のひらにドキッとしてしまう。

思わず目を丸くする私の手の甲を、節くれ立った男の人の指先が撫でた。どこか慈しむように。

「ええと。そ、そんなことはないっていうか、むしろ嬉しい……」

変なことを口走ってしまうのは、混乱しすぎて訳が分からないからだ。

それに、ふと思ったのだ。知らない人とはしたくない。

でも恭介くんとならいい、って。

どうしてそう考えてしまったのか思考をまとめる間もなく、恭介くんは生真面目な顔で、私の手を握る力を少し強くした。

「では決定だ。そうしよう。君と俺は今からそういう仲だ」

「……は、……うん」

自分から「男遊びする」なんて言い出したくせに、いざとなるとちよつと怖気づいてしまう——けれど、そのまま領いた。それはやっぱり、私が「恭介くんになら抱かれてもいい」と思っているからだ。……違う、抱かれないって。どうして？

どうして私、恭介くんに触れられたいと思っているの？ 自分で自分が分からない。

私はさつき大好きな人に裏切られたばかりだったのに。

「あ……恭介くんの提案は、要はセフレってこと？」

「そうなるな」

あくまで普通のトーンで返してくる恭介くんを見て、つい笑ってしまった。

「恭介くんがセフレ作るなんて想像できない」

「俺も莉子がセフレ作ろうとするなんて想像もしてなかった」

そう言っただけは恭介くんは微かに笑った。男の人の笑い方だ。

ふと目線が繋がれた手に向けた。私よりずっと大きな、筋張った手の甲。節の高い指。あのときは、全然違う。

出会った頃——幼稚園のときは、毎日繋いでいたけれど、小学校に上がって周りにか  
らかわれてから止めたのだ。……と、ふと違和感に襲われる。

小学校のときも、繋いでいたことがある。強く強く、お互いの手を握り合っていたことが。

なんだっけ、なんだっけ……

思い出そうと悶々としている私を、恭介くんは不思議そうに見る。

「どうした？」

「いや、ううん？」

きゅつと繋がれた手。いつのことだっけ？ ふたりに手を繋いで、そう、どこかへ向かった。

どこでもないどこかへ。



十歳の頃の私は無敵。だって周りより背が高かった。この時期に身体が大きいついてうのは、かなりのアドバンテージがある。

大人になつたらすっかりぴったり標準サイズになっちゃったけど、小学五年生の私は、恭介くんよりずっと背が高かった。

恭介くんは、カツコよくて足が速くて頭がよかつたから、めちゃくちゃ人気があった。

背が小さいのに、恭介くんは無敵だった。

幼稚園から一緒に、仲良しな私たちは思春期に入り始めて少しだけ距離を置いたけれど、それでも仲良しな友達には違いなかった。

私は、好きだったけれど。おそらくは、一方的に。

そんな片方ベクトルな恋の相手、恭介くんが私の家にやってきたのは、小学五年生の、ある日の放課後のことだった。初夏で晴れているのに、梅雨入りだつてまだ先のはずなのに、やけにジメジメしていたのを覚えている。

「莉子、恭介くん来てるよ」

そんなお母さんの声に玄関まで行くと、恭介くんが俯うつむきがちに立っていた。

「恭介くん、どうしたの？」

「莉子、俺」

恭介くんはそのまま黙り込む。湿気を含んだ生ぬるい風が頬を撫でていく。

子供ながらになんだか尋常じゃない雰囲気を感じて、黙ってじつと彼からの言葉を待つ。しばらくの沈黙のあと、恭介くんは思い切つたように口を開いた。

「俺……転校することになった」

「てん、こう」

思わず復唱した。脳がうまく言葉を咀嚼そしやくしてくれず、私はぼかんと突つ立ってしまった。

……転校!?

「ど、どこに?」

「仙台」

「遠いじゃんっ」

私たちが育った街から仙台へ行ってしまうというのは、小学生だった私たちにとって海外に行くみたいなき感覚だった。

「やだよ!」

「……俺だって」

ざあ、と湿気を含んだ風がまた、吹いた。庭先の、少し気が早い青の紫陽花あじさいが揺れる。

「……茉莉」

「……っ、なあに」

私は溢あふれる涙を手で拭う。パニックとショックで、涙が止まらない。

「茉莉、一緒に……逃げてくれるか」

恭介くんはとても真剣に、そう言った。私は呆然と、その言葉を聞いていた。続けて彼がしてくれた説明では、「別に本当に逃げ切る必要はない」らしい。

「俺が転校したくない、つてのが伝わればそれでいいんだ。俺と母さんは、この街に残る」  
「ストライキってかんじ?」

「ちょっと違うけど……、そう」

私はすぐに頷いた。

「行こう。今すぐ逃げよう。遠くまで」

「……いいのか? 俺が言い出しておいてなんだけれど、絶対怒られるぞ」

「いいよ、恭介くんが転校しないためなら、なんだつてする!」

一瞬虚を突かれた顔をしたあと、「ありがとう」つて恭介くんは微笑んだ。

「……でも、いいの? お父さんと離れることになるんじゃない」

「いいんだ!」

強い声で、恭介くんは叩きつけるように言った。私は思わずびくりと肩を揺らす。

「……ごめん。でも、いいんだ。本当に」

「う、ん」

恭介くん、お父さんのこと大好きなはずなのに……いいのかな。

恭介くんのお父さんは弁護士さん。「人を助けるために働いてるんだ」つていつも言っていた。  
かっこいいんだつて。

「……ええと、いつにしよう?」

「今週末。土曜日でもいいか」

「分かった〜」

気楽に答える私を、拍子抜けしたように恭介くんは見る。

「本当に、いいのか」

「いやーよ。でもどこまで逃げるの？」

「……どこでもないどこか、かな」

「ふーん」

顔に似合わずポエミーなんだよね、恭介くんは。

そうしてやってきた、土曜日の朝。身の回りのものだけ持って、私と恭介くんはバスターミナルを歩いてきた。お互いの手をしっかりと握って。

「手持ちのお金、ふたり合わせても一万円だから」

「うん」

ほとんど恭介くんのお金だったけれど。お小遣いを毎月使い切る私に、手持ちはほぼなかったのです……

「電車だとそこまで遠くは行けない。でも、バスなら——」

そう言う恭介くんと手と手を取って乗り込んだのは、長野行き的高速バスだった。乗り込むときに、こっそり聞く。

「子供だけで、止められないかな？」

「堂々としてれば大丈夫」

言われた通り、顔を上げて胸を張って乗り込んだ。運転手さんは、ちらりと私たちを見ただけで何も言わなかった。

「莉子、こっちの席」

恭介くんの手を引かれて、バスの座席に座る。ふう、とひとつ深呼吸をした。

「しっかりしてる弟さんだね」

近くの席のおばさんに、そう言われる。そうか、身長差もあるし、姉と弟に見えていいのか。

誤魔化すようにえへへと笑う私と、ふい、と窓の外を見る恭介くんと。

「……恭介くん？」

恭介くんは、なんだか悔しそうだった。幼く見られたからかな？

そのうちにバスは出発して、私は寝たり起きたりを繰り返して、何度かサーブスエリアでも休憩した。高速バスなんて初めてですごく楽しかったし、何より久しぶりに恭介くんと手を繋いでいられることが嬉しくてたまらなかった。

恭介くんとなら、何も怖くなかった。

長野駅に着いてバスから降りると、私は恭介くんを見る。

「どこ行く？」

「次は電車かな」

私たちはまた手をしっかりと握り合って、路線図を見上げ適当に電車に乗る。そんなことを繰り返してうちに、とつぷりと陽が暮れてきてしまった。

私と恭介くんは、知らない街を歩き続ける。

「暗くなつてきちゃったねー。どうしよ？ 野宿？」

無邪気に聞いた私を、恭介くんはちらりと見てから「近くに神社があるみたいなんだ」と答えた。

「駅の観光案内に書いてあった。多分、大きな神社ではないから、人ももういないと思う」

「忍び込むの？」

私はちよつとウキウキして答えた。なんか、探険みたい！

笑顔の私を見て、恭介くんは少し目を瞠る。それから頷いた。

「そ、忍び込む」

「わるーい……つと、嘘！」

ぼつりぼつり、と雨が降ってきた。

「さ、さっきまで晴れてたのに！」

「急ごう！」

私たちはぎゆうつと手を繋いだまま、走って、走って、その神社に辿り着く。

古びた小さな神社の本殿に、私たちはこっそりに入った。恭介くんがぱちりと懐中電灯を点ける。

「おじゃまします……」

古いけれど掃除の行き届いたその神社は、なかなか居心地が良さそうだった。

強くなった雨の、屋根に打ち付ける音が本殿内に響く。

「莉子、大丈夫か」

「何が？」

「びしょびしょで、……服」

「ああ」

私は自分を見下ろす。このままだと風邪ひいちゃうね。恭介くんもおんなじだ。

「俺あっち向いてるから、着替えよう」

「うん」

お互い反対を向いて、服を着替えようとして……私は呟く。

「どうしよう、着替え、濡れちゃってた……」

雨がカバンに入り込んでいたのだから、なんだかしつとりしてしまっていた。べしよべしよじゃないだけマシかな？ と悩んでいると、ぱさりと乾いた何かが飛んできた。

「わあ」

「俺の、濡れてないから。それ予備の」

「いいの?」

乾いた長袖のTシャツとジャージ。嬉しいけど、入るかな? って少し考えちゃったのは、私のほうがよほど背が高かったから。

幸いにもギリギリ入って、人心地つく。

「ありがと。さっぱりした」

「うん。……あつ!」

こつちを向いた恭介くんが、真っ赤になって反対を向いた。とんでもない勢いだっただ。私は首を傾げて——さすがに気が付く。小さめの恭介くんの服だと、幼いふくらみかけの胸がものすごく強調されてしまっていた。

「……わあ!」

慌ててぱつと三角座りをして、苦笑いを浮かべる。

「ご、ごめんね。これでもう見えないよ」

「……っ、うん」

恭介くんは少し戸惑いながら、私の横に来て座った。お互いの体温を分け合うみたい

に、寄り添ってくっつく。

その体温が、雨で冷えた身体にあったかい。

「……今頃、莉子の親御さん心配してるな」

「オヤゴさん? 親のこと? 大丈夫、書き置きしてきた」

「書き置き?」

「恭介くんと、どこでもないどこか、まで逃げますって」

恭介くんが噴き出した。

「ポエミー」

「最初に言ったの、恭介くんだよ!」

唇を尖らせて怒ると、恭介くんは「ごめん」って笑った。

そのまま本堂の壁に寄りかかる。普段だったらとても眠れる環境じゃなかったと思うけれど、長距離の旅に疲れていたのか、あつという間に眠りに落ちていた。

ふ、と目が覚めると身体が熱くて、痛くて、苦しかった。

「……莉子?」

少し焦ったような、恭介くんの声。

「……あれ? ここどこ?」

出した声は変に掠れていた。フワフワした頭で考える。……あ、そっか、ここ、どい

でもないどこかだ。

懐中電灯の灯りで、薄暗い神社の中の様子が見えた。

私たちはふたりでくつついて、座ったまま眠っていた。

「きついかな？」

「んー……ごめんね？ 起こして」

「いいんだ。……莉子、熱、が」

私の額に、恭介くんの小さい手が触れた。その冷たさが心地よい。

「……帰ろう」

恭介くんが唇を噛み、言った。

「なん、で？」

「こんな状態の莉子を連れていけない。駅前に交番があったから、あそこから親に連絡してもらおう。病院にも行こう」

恭介くんは立ち上がる。

まだ、外は暗い。でも雨はすっかり止んだようだった。

「すぐに行くってくるから」

「……っ、待ってっ！」

私は恭介くんの手を握る。

「やだ、置いてかないで、こんな暗いところに」

「莉子」

「こわいよ」

熱で気弱になっていた、ってこともある。それに……なんだかどうしても、恭介くんと離れたくなかった。暗がりの中で、恭介くんが頷く。

「分かった」

そう言っただけで恭介くんが「莉子をおんぶする」なんて言い出したから、私は慌てて首を横に振る。

「そ、それは無理じゃない？ 恭介くん、潰れちゃうよ」

「潰れない。……俺、男だから」

「関係ないよ。私のほうが大きいし」

「それこそ関係ない。ほら、置いてくぞ」

「……っ、うん」

私は恭介くんの背中におぶさる。ふらつく恭介くんと、熱でふうふう言ってる私。

恭介くんの小さな背中はずっともあつたかくて、居心地が良くなって、私はとろりと眠りに落ちた。

気が付いたら病院だった。輸液ポンプと、揺れる点滴の管くだがやけにまぶしく見える。お母さんとお父さんが私を覗き込み、ほっとした顔をした。お母さんの目は真っ赤だった。急激に申し訳なさが襲ってきて、泣きながら「ごめんなさい」を繰り返す。

怒られると思身身を縮めたけれど、抱きしめられるばかりでまったく怒られなかった。

「恭介くんは？」

しやくり上げながら聞く。

「元気だよ。今は寝ててね」

お母さんのその言葉に安心して眠る。

翌朝には退院して、お父さんの車で家に帰った。まだ熱がある私はまた眠って……熱が下がった頃、恭介くんがもう転校してしまったことを知る。

ポロポロ泣いてる私の頭を、お母さんはずうっと撫でていてくれた。



「どうした、莉子。……やめておくか？」

低くなった、今現在の恭介くんの声にはつと目を上げる。

どうしてだろう、すっかり忘れていた、私と恭介くんのどこでもないどこかを探す旅。

私を見つめるまなざしは、あのときと変わらない。

その瞳を見つめているうちに、気が付けば微笑みを浮かべて小さく、けれどしっかりと頷いていた。

「ん、よろしく……お願いします」

恭介くんが目を細めた。どこか安心したような表情に見えて、なぜだろうと不思議に思う。恭介くんはその顔のまま「ただ」と口を開く。

「ひとつ約束してほしい」

恭介くんはそう言つて大きく息を吸ったあと、じつと私を見つめた。

「俺とそういう関係でいる間は、他の異性との性的な接触は厳げんに慎つつしんでほしい」

「げ、厳に慎んでまいります……」

勢いに押されるように返事をする、恭介くんは頷いた。それから腕時計を確認して「帰るか」と小さく言う。

「また食事にでも行こう。相変わらずハンバーグが好きなのか？」

「ハンバーグ……？ 恭介くんの中の私、一体何歳なの？」

自分だってまだ十歳の恭介くんを引きずっているくせに、棚を上げてそんなことを言う、恭介くんはきよんとしたあと、「ふはっ」と噴き出して目を細めた。

「悪い。で、どうなんだ？」

「……まあ、まだ好きだけど」  
大好きだけど、ハンバーグ。

そう答えると、恭介くんは肩を揺らして笑った。ああ、笑い方は昔の恭介くんのままだ。その事実が、泣きたいほどに嬉しかった。

なんでだろう。抱かれたいって思ったり、ささいなことが嬉しかったり、一体どうしちゃったんだろう、私。

「職場の近くにうまい店があるんだ。今度連れていく」

「ありがと……っというか、帰るの？」

「ん？ ああ、もちろん送っていく。家、どのあたりだ？」

「そうじゃなくて……明日も仕事？ そういえば土曜日なのにスーツだね、恭介くん」

「いや、明日は休みだ。今日はこのあたりでちょっと仕事……」

恭介くんは訝しげな顔をして眉を上げた。

「まさか、莉子」

「え、やだ？ さっきのセフレうんなん云々の話、嘘？」

「つバカな、本気だ」

恭介くんはやけに焦った顔で身を乗り出してくる。私はにっこりと微笑んだ。本当は緊張で手の先がちよっと冷たくなっていただけけど、でも余裕っぽく表情を作って。

「なら、エッチしよ？ 恭介くん」

恭介くんはしばらく呆然としたあと、ぐっと眉を寄せた。

何か決意でもしたような、そんな表情だった。

「恭介くんって検事さんなの？ それってアレだよ、逮捕された人を起訴するお仕事」

「まあおおむね、その認識で問題ない。捜査権や逮捕権があったりもするが」

「昔から正義感強かったもんね」

「そうかな」

不思議そうに言う恭介くんに、私は笑う。この人はナチュラルに、そういう人だった。昔から。

「ほら、クラスでいじめがあったとき。私の友達がいじめられてたでしょ？ あれ、助けてくれた」

「……俺は、莉子のほうがカッコいいと、そう思って見ていた」

きよとん、と私は恭介くんを見上げた。カッコいい？

「莉子は彼女を裏切ろうと思えば裏切れた。いじめる側に回れば、莉子も嫌な思いはしなかつたろう？」

「え、それ嫌な思いするじゃん。友達いじめるほうが嫌な気持ちになるんじゃない？」

ヤダ。そんなのしんどい」

私が反論すると、恭介くんは少し目を瞠って、それから頷いた。

「……その通りだ」

「でっしょー？」

あはは、と笑うと恭介くんが少し目を細める。なんだかそれがやけに照れてしまったて目線を外す。さつきからこんな感じ。

「へへ……」

そして照れ笑いする私を、恭介くんは生真面目な顔でじっと見つめてくる。それが余計に気恥ずかしくて……！

どうしてこんな雰囲気になってしまっているかというところ、ここが恭介くんのベッドの上だからだ。寝心地のよさそうなマットの上で、お互いなぜか正座で向き合っているという、謎の状況ができて上がっていた。

恭介くんはバーで何度か『本当にいいのか』とか『後悔しないな？』なんて意思確認をしたあと、私の手を引いて自分のマンションまで連れ帰ってくれた。

単身用っぽいそのマンションは綺麗に片付いてて、……というか超絶シンプルだった。最低限の家具家電と、大量の本が詰まった本棚。目立つのはそれくらい。

驚いたと同時に、あまりにも恭介くんらしくて笑ってしまった。小学校のときも、ラ

ンドセルも机の中も整理整頓されていたから。

そんな恭介くんの家でシャワーを借りて、恭介くんのスウェットも借りた。すごくぶかぶかで、改めて恭介くんは大きくなったのだと、大人の男の人なのだと感じて、少しドキドキしてしまった。

『り、莉子!? なんでベッドに』

恭介くんがシャワーを浴びて戻ってきて、開口一番にそう叫ぶ。まだ髪の毛もちゃんとは乾かし終わっていないようだった。

『ち、違うの？ やるんじゃないの？』

『やるだなんて、そんな直接的な言葉』

恭介くんがぐつと眉を寄せた。さつき飲み屋さん街でも見て、それから小さな頃も何度も見たことのある表情はアレです——そう、説教モードだ。

『で、でも恭介くん。他になんて言えばいいの。エッチ？ セックス？』

恭介くんは難しい顔をしてベッドに乗ってくる。ドキッとして身を硬くしたけれど、かといって押し倒してくる雰囲気ではなかった。そんなわけで正座で向かい合っていたところ、恭介くんがふと『とりあえず俺は怪しい者じゃない』とか変なことを言い出した。

『ん？ 知ってるよ。宗像恭介くん』

『いやそうではなくて……十七年ぶりなんだぞ、少しは警戒してほしい。そのうち壺と

か買わされるぞ』

『えっ、なんで私が壺買わされたこと知ってるの?』

「……!」

めちゃくちゃ驚いた顔をされた。そんなに驚愕しなくなつて!

『冗談冗談。さすがにないよ』

「……あり得そうで怖い』

連れ込んでおいてなんだが、と恭介くんはベッド脇に置いてあつた鞆から名刺入れを取り出す。

そうして受け取つた名刺には「京都地方検察庁検事 宗像恭介」の文字。

『えーっ、超お堅い仕事してるね』

イメージ通り、ぴつたり。ふふ、と笑いながら、彼のお父さんが弁護士さんなのも今のお仕事に関係あるのかなあ、なんて思つてしまふ。

そこから『それってアレだよね、逮捕された人を起訴するお仕事』に繋がる。

「恭介くん、誘つておいてなんだけど……私たち、エッチな雰囲気になれないんじゃない?」  
空気がいたたまれなくて、私は眉尻を下げて言つてみた。

確かに恭介くんを抱かれないと思つた。思つたけれど、それは私だけのことだつたんじゃない……実際に恭介くん、指一本すら触れてこないし。

「あの、無理そうなら……」

「そんなこと言つたか?」

恭介くんはそう呟き、私の手の甲に口付けた。触られたところがひどく熱く感じて……ぶわり、とその熱が頬まで来てしまつた。

わ、私多分、今とんでもなく顔が真っ赤なんじゃないだろうか。

「ひと言でも言つたか? 俺がお前を抱きたくないって」

私は耳たぶまで熱に支配されながら、ぶんぶんと首を横に振つた。恭介くんはそんな私を見てフツと頬を緩める。

「……可愛い」

恭介くんの掠れた低い声に耳を疑う。可愛い? 私が……っ?

ドキドキしすぎて固まつた私の頬を、彼はゆっくりと撫でた。それは慈しむような触れ方で、次は私をぎゅっと抱きしめてきた。

大切なものみたいに。宝物みたいに。

そんなふうを抱きしめられドキドキで心臓が爆発しそうになつたまま、私は考える。セフレってこんな感じなの? こんなに丁寧な触れ方をしてもらえるもの? 蓮からだって、こんなに繊細に触れられたことはない。

やっぱり恭介くん、すごく優しそう。遊び慣れている……とは、彼の性格からしてあ

まり思えないのに。ただ恋人はひっきりなしにいただろうし、それなりに色々経験してきたに違いない。

そう考えたとき、胸の奥で何かがチリッとひりついた。何、これ？

私が彼の腕の中で首を捻ひねっている一方、当の恭介くんは私を抱きしめたまま動かない。

「……恭介くん？」

声をかけると、彼は「ふう」とひとつ大きく息を吐いて、それから私を覗き込む。

「莉子。キスしても構わないか？」

いちいちそんなことを聞いてくる恭介くんの唇に、私はちゅうと唇を重ねた。

恭介くんは驚いたように固まったあと、私の後頭部をその大きな手で支えるようにしながら、食べてしまうみたいに深くキスをしてくる。

誘い出される舌と、蹂躪じゅうりんされる口内と、恭介くんの熱い手と。

恭介くんの舌つて、結構分厚いんだ……蕩とろけそうになる思考の中で、ぼんやりとそんなことを考えた。大人になってからしか、分からないこともある。

「ん、ふっ」

息とも喘あせぎともつかない声が零れた。ちゅくちゅくと舌が摺すり合わされ、搦からめとられ、甘く吸われる。

「は、あ……んっ」

苦しくて、うまく息ができない。

なのにそれが心地よくて、とろんと身体から力が抜けていく。

ぼすり、とふたりもつれ合うようにしてベッドに倒れ込んだ。じっと私を見つめる恭介くんの瞳は、信じられないくらいにまっすぐだった。

時が止まったかのように、あたりの音が掻き消えていく気がした。

恭介くんしか、見えない……

「莉子」

ただ、名前を呼ばれて。

「恭介くん」

ただ、名前を呼び返した。

もう一度重なる唇と、入り込んでくる分厚い舌と、少し迷うように私の胸に触れてくる大きな手。

恭介くんが唇を離すと、つう、と銀の糸が続いた。それをべろりと舐め取られる。やわやわとした、乳房へのスウェット越しの刺激にお腹の中が熱くなる。

蓮と別れたばかりなのに、幼馴染こせなじみに触れられてきゅんきゅんと感じている、私の身体。お腹の奥が切なくくずくず焼やって痛いくらいだ。とろとろと身体から淫みだらな水が溢れそうになるほど、本能ほんのうが疼うずく。こんな刺激じゃ足りないって。もっとももっとと、彼にイヤラ

しいことをしてほしくてたまらない……！！

「恭介く、ん……ちゃんと触って？」

熱い息が漏れた。

恭介くんが息を呑むと、それに合わせて男性らしい喉仏が微かに動いた。彼はするりと私のスウェットを胸の上まで上げる。空気に触れて、少し冷たい。そこに直接、恭介くんの熱い手が触れた。

「あ、……ッ」

欲しかった刺激に、思わず高い声が漏れ出た。その声を聞いた恭介くんがぐっと眉を寄せる。

「や、……ッ、私、何か変……？」

「なんで？」

「だって、私、元カレしか知らないから……だから、喘ぎ方とか変なのかもって……」

恭介くんはじっと私を見つめたあと、「少し変かもしれない」と呟いた。私の先端を、さゆっと摘んで。

「あッ、ふぁ……んっ……」

変だ、って言われたのに喘ぐのを我慢できない。涙目で恭介くんを見上げて「どこが変？」となんとか聞く。

「どこ？」

「う、ん……やあつ、そんなふうに触るの、だめ……」

摘まれたままぐにぐにと指の腹で擦り合わされ、きゅっと潰される。

「あ！」

「……どこ、か。自覚がないのが莉子らしいし、君の元カレは世界一バカだと思う」

「ッ、やああんっ」

べろり、とその先端を舐められた上に甘噛みされ、思わず腰が浮いてしまう。あさましく快楽を追う私に、恭介くんのやたらと甘い声が落ちてきた。

「変だ。……ものすごく、可愛すぎる」

「それって、どう、いう……っ、あ、あ、あ……ッ」

ぐにぐにと形が変わりそうなくらいに乳房を揉まれたかと思えば、反対側の先端を恭介くんの舌で突かれ、温かな口の中でちゅくちゅと弄ばれてしまう。

記憶の中の十歳の男の子と、今私を翻弄している二十七歳の男の人が、頭の中でぐちゃぐちゃに溶けて、私の身体も同じように蕩けていく。

「あ、あ、あ、いや……」

恭介くんは顔を上げ、ただ翻弄される私の頭を撫でた。

髪の毛をさらり、さらりと撫でるその手つきは、さつきから変わらず慈しみ深いもの。

「莉子。下、触るぞ」

いいよな？ と私の耳元で囁かれた声はとっても熱くて、背中までゾクゾクしてしまふ。

恭介くんも興奮しているのかなって思うと、余計になんだかドキドキした。

鼓膜が鼓動が妙に煩く響いて、するりと脱がされていく服が焦れつた。

恭介くんの綺麗な、でも節の高い男性らしい指が私に触れた。くちゅつ、と音がして、顔から火が出るかと思うほど恥ずかしい。だから声を我慢したのに、ゆつくりと挿し入れられると、もうだめだった。

「あ……」

自分から零れた、どこか媚びるような上ずった声。たった一音なのに、とてつもなく恥ずかしい部分を恭介くん知られてしまったような気分になる。

恭介くんはじつと私を見つめ、それから深く息を吐いた。その双眸はギラギラしていて、思わず目を瞠った。お互い無言で視線を交わしたまま、彼の指が少しづつ、深く埋め込まれていく。

ゆつくりと動くそのもどかしい指が、私の感じるところに触れた。浅い恥骨の裏側あたりを、きゅつと押し上げる。

「あ、や……ッ」

腰に電流が走ったみたいに、過剰なほどに反応してしまう。ぐちゃぐちゃだったナカが更に蕩けて、どろどろに溶けていく。

「……ッ」

「……ん……ッ」

零れそうな声を、両手で口を押さえて必死にこらえる。どうしようもなく甘えて蕩けた声だ。羞恥心で死にそう……！

どうしよう私、幼馴染に喘がされてるっ……

今更だけど、すごい今更だけど、恭介くんとシてる！

とってもイヤらしいことを！

机を並べて一緒に音読とかしてた、恭介くんと！

給食のデザート、じゃんけんして奪い合ってたのに！

「はあ、あ」

勝手に涙は浮かんでくるし、でも気持ちよさに抗えなくて腰は動くし、声は出ちゃいそうだしでもうめちゃくちやだ。

「莉子」

「ッ、ん、ふあ……ん、ヤダっ、ダメえっ」

口を押さえていた両手を、恭介くんに軽々と片手で外される。

「ヤダ、……ッ声っ、漏れちゃう……ッ」  
「聞きたい。聞かせて」

そう言う彼の声は、低く掠れているのにとても甘い。子宮を鷺掴みにしてくる、官能的な声音だった。きゆうつと彼の指を締め付けてしまうと、ふ、と恭介くんが笑った。

「荊子、これ気持ちいい?」

恭介くんの指が増やされて、ぐちゅぐちゅとナカをかき回される。

「ひゃ……ッ、きょーすけく……んっ、あつ、あ、ッ、や……んっ」

甘く喘いってしまう箇所を擦りながら、攪拌かくはんしてくる彼の指。触れられるところ全ての神経が剥き出しになったかのような快感だった。私のナカはうねりながら悦びよろこび、とろとろに蕩けて淫らな水を溢れさせる。

「っ、は……可愛い声」

薄く笑った恭介くんを見て、私は息を呑む。

こんな表情、初めてだったから——男の人の顔をしていたから。

ぐちゅぐちゅとかき回されるたびに、ぞくり、と腰骨から背中にかけて快楽が電流のように駆け上がる。

「んあ、あ、あ、きょーすけ、きょーすけくんっ」

あまりの快楽に、舌がうまく回らない。

「ダメ、だ……めっ、イク、っ、ヤダ、ヤダあ……っ」

私は声もイくのも我慢できなくて、派手に喘ぎながら、ぼろぼろと涙を零して恭介くんの指を切なく食いしめた。肉厚な粘膜が悦楽に震え、きゆうきゆう、と収縮しているのが分かる。

「……指、食いちぎられそう」

恭介くんは、あの笑顔で言った。——男の人の、貌かお。

「んっ、はあっ、ごめん……」

「なんで謝るのか分らない」

ちゅ、と涙を唇で吸われた。

「俺がそうさせているのに。感じてくれて、すごく嬉しい」

「……ん、っ」

恭介くんは少し身体を離して、着ていたスウェットをさっと脱ぐ。

思わず見つめてしまうほど、男らしい身体。

腰のラインがすごく綺麗で、ちゃんと筋肉もあるのに……いや、あるからこそ引き締まってる? どうなんだろう……

「……荊子。見つめすぎ」

「わ、わ、ご、ごめん」

謝りながら、照れてしまっている恭介くんから目を逸らす。私も妙に照れてしまつて、頬に熱が集まる。

恭介くんはさつきここに来る途中、コンビニで買ったコンドームの箱を開けた。

それをつけている恭介くんのを、またもや私は凝視して黙り込む。……入るよね？

……え、大丈夫？ 私死なない？

「どうした？」

「いいえ……」

私もごもご言いながら覚悟を決める。うん、女は度胸だ。なんでもチャレンジだ。

「ばっちこい！」

「なんだそれ」

恭介くんは嘖き出し、私をじっと見つめた。

「なあに」

「莉子。俺は」

さらりさらり、と私の髪を撫でながら彼は続ける。

「中途半端な覚悟で、君を抱くわけじゃない」

「……覚悟？」

ぽかんとしてしまふ私に、恭介くんは苦笑してみせる。

## 立ち読みサンプル はここまで

「分からないなら、いい。……分からないで、いい。ただ」

恭介くんは私の唇に、甘噛みするようにキスをひとつ落とした。

「俺に抱かれていればいい」

「……っ、ふあ、……んっ！」

ずぶり、と挿入<sup>はい</sup>ってきた彼の熱の圧に、私はくぐもつた甘い声を上げた。無理、おっ

きすぎる、入んない……っ。

「んあ……っ、おっき、……い、ヤダ、無理……っ」

「入るから。……力、抜いて。莉子」

宥<sup>なだ</sup>めるように優しくキスをされ、私はほうと息を吐いた。

「いい子」

恭介くんがそう言つて私の頭を撫でてくれた。肋骨の奥で、鼓動が切なくきゅんと跳ねる。

何これ？

でもそんなふういきゅんとしたのがよかったのか、私のナカはぐちゅりとぬるついた水音を立てて、彼のものを最奥までみっちり<sup>み</sup>と啜<sup>く</sup>え込んだ。

「ほら、……入った」

「……う、んっ」